

第5章 考察

(1) アドバイザーによる考察

『市民の幸せ実感調査データによる「幸せで住みよいまち長久手」の現在』

草郷孝好

はじめに

長久手市は、2016年の「住みよさランキング¹」(東洋経済新報社『都市データパック 2016年版』)では、全国第二位にランク付けされるなど、全国でも指折りの住みよい都市の一つとして定評を得つつある。このランキングは、安心度、利便度、快適度、富裕度、住居水準充実度の5つの観点から、公的統計データを用いて、各都市の持つ住みやすさを測っている。住みよさの評判を得ることはよいが、気になるのは、長久手市で実際に生活する住民によるまちの住みよさの評価はどういうものなのか、であり、幸せ度の高い長久手につながる住みよさを実現しつつあるのかどうか、という点である。

長久手市は、2050年に日本一幸せなまちの実現を目指し、その目標に向けさまざまな取り組みを展開している。その活動の一つとして、ながくて幸せのモノサシづくりに着手、市民と市役所職員の中から有志が協働チーム(ながくて幸せ実感調査隊)となり、ながくて市民の幸せとは何か、幸せなまちの状態の掘り下げ、幸せなまちの評価項目などについて議論し、2013年に「ながくて幸せ実感調査」を行った。この調査結果をもとに、幸せなまちづくりにつなげていくための種や芽を探す活動(ながくて幸せ実感広め隊)が始まり、2017年には、ながくての幸せ実感の現在を確かめるために2回目の調査が実施された。

本調査は、長久手の生活当事者である市民と行政の有志が、幸せで住み続けたいまちを構想し、その実現を側面サポートするツールとして開発した市民意識調査である。市民目線で、生活の質の高い幸せで住みつづけたいまちを実現するためのツールとして、デザインされ、調査で収集されたデータを活用して、まちづくりに重要な役割を果たす市民による地元ながくての評価を行い、評価結果をもとに改善につなげることを目指している。それは、先の住みよさランキングのような外部者による一律の評価とは異なる長久手市独自の視点と性格を持つものである。

そこで、2013年と2017年に収集された生活実感データをもとに、内部者(生活当事者である市民)の視点で幸せ感や、市民の幸せ感を左右する8つの領域―「健康(こころとからだ)」「子育て・教育」「環境(自然と生活)」「つながり(個人と地域)」「防災・防犯」「福祉」「文化・生涯学習」「生活インフラ」―の動向に焦点をあてて、内部者の視点で長久手のまちの現状評価に関する分析を試みる。

¹ 「安心度」「利便度」「快適度」「富裕度」「住居水準充実度」の5つの観点に分類し、採用15指標について、それぞれ平均値を50とする偏差値を算出、その単純平均を総合評価としてランキングしたもの。

(1) 個別の質問項目の動向

まず、幸せ度や8つの領域ごとの動きを見る前に、調査票の個別質問項目ごとに、2回の調査結果から、目新しい動きがあるかどうか、動向²を確認してみる。「図4-0-3 暮らしやお住まいの地域（生活実感）について」（第2編第4章、91ページ）は、2013年と2017年の調査結果をもとにして、8つの領域で選定した質問項目の平均得点をグラフ化している。大半の項目において、1回目（2013年）と2回目（2017年）の調査の間で、大きな動きは見られない。しかし、興味深いのは、いくつかの項目で、プラス（増加）やマイナス（減少）の変化が見られることである。

プラスの変化が見られた質問項目を挙げると、「就業しやすい環境にあるか」、「インターネットや電子メールをコミュニケーション手段に利用しているか」、「子育てや教育に関する設備や施設が整っているか」、「自宅以外の居場所があるか」、「お客・来場者として地域の活動や行事に参加しているか」、「災害時の避難所と避難方法を知っているか」、「買い物や通院に便利か」、「たつせがあるか」などである。2013年から2017年の4年間で、長久手市が市民主導の地域コミュニティ基盤形成に向けた様々な取り組みを展開してきたことが調査結果から読み取れる。他方、「日頃から環境に配慮した生活をしているか」、「現在、将来の自分または家族の介護に対して不安を感じるか」、「日常的に近所づきあいをしているか」などは、マイナスの変化を示している。環境、つながり、福祉といった領域であるだけに、長久手をよりよいまちにしていくために、重点的に取り組むべき課題に気づかせてくれる。

市民の幸せ実感調査データを活用し、長久手市における暮らしを市民目線で多面的に評価することは、長久手市のまちの改善に生かすことができる。たとえば、前回よりもマイナスと評価された項目がわかれば、マイナスの理由を探る、今後改善するための方策や取り組みを検討する、あるいは、他の項目よりも優先的に取り組むことを検討することができる。このように、個別項目の経年変化を把握することによって、まちの生活状況を把握できるのだが、長久手の掲げる「幸せに住みよいまち」を実現していくためには、幸せ感を左右する8つの領域の観点から調査データを整理しなおし、経年変化動向を探っておく必要がある。

(2) 8つの領域に関する市民評価の動向

8つの領域の市民評価動向を把握するため、2013年の1回目の調査データ分析時に行った「領域別平均得点」³を計測、分析した。そこで、2013年と2017年の領域別平均得点の

² 調査対象者は、両調査ともに、ランダムサンプリングによるものであり、パネル調査ではない。そのため、変化と断定することはできないので、「動向」と表記する。

³ 領域得点とは、各領域ごとに設定した質問項目（4項目から11項目まで）の回答結果を領域ごとに単純平均して算出している。

動向を確認しておく⁴。表1は、2013年と2017年の調査結果をもとにして作成した8つの領域項目（全領域回答者のみ（注3参照））の領域別得点である。

領域別平均得点で、各領域ごとの動向をみると、生活インフラ、防災防災、子育て教育、つながりがプラス、他方、健康と文化生涯教育がマイナスとなっている。生活インフラの差異は、明確ではあるものの、他項目では変化らしい変化は見られない。

表1：8つの領域の領域別平均得点（2013年、2017年）

調査年	健康	子育て教育	環境	つながり	防災防災	福祉	文化生涯学習	生活インフラ
2013	3.75	3.55	3.86	3.37	3.32	3.02	3.33	3.62
2017	3.70	3.59	3.87	3.40	3.38	3.02	3.29	3.75
動向	-0.05	0.04	0.01	0.03	0.06	0.00	-0.04	0.13

8つの領域を平均得点の高い順に並べると、環境、生活インフラ、健康、子育て・教育、つながり、防災防災、文化生涯学習、福祉となる。8つの領域の中では、つながり、防災防災、福祉といった地域の力が試される項目の評価が低い。幸せで住みよいまちを実現するには、個人と地域の持つつながり、地域の防災防災活動や多様な住民を包摂する福祉の実現が欠かせない。調査データから、長久手の幸せ感を高めるには、これら3つの領域に注力する必要があるといえる。

2013年と2017年の領域別平均得点同士を比べても、目立った変化はないようであるが、忘れてならないのは、これら8つの領域は、長久手市民の幸せな生活実現を具体化し、幸せ感を左右する領域であるという点である。領域別平均得点は、調査回答者の属性（性別、年齢層、職業、所得水準、家族構成、小学校区、居住歴）や総合的生活評価項目（幸せ感、生活への満足度、地域の住みやすさ、地域への愛情、今後の居住意向）との関係などを考慮せず、回答結果の単純平均を算出しただけにすぎない。そこで、長久手が目指す「幸せに住みつづけたいまち」の実現に沿って進んでいるかどうかを確認するため、市民の総合的生活評価項目との関係を掘り下げてみる必要がある。

（3）幸せ感と領域別平均得点の動向

まず、回答者の幸せ感と領域別平均得点の動向を見してみる。図1は、2017年の調査データをもとに、幸せ感の回答を4段階⁵にして、各段階ごとに、8領域の平均得点を算出したものである。興味深いことに、幸せ感の低いグループから幸せ感の高いグループへと進むにつれて、8つの領域全てにおいて、領域別平均得点が増加している。つまり、幸せ感の高い人ほど、多くの領域項目でよりよい生活状態にあることを示している。

⁴ 8つの領域ごとの得点算出の際、全回答の中から、8つの領域群の48指標すべてに回答しているもののみを抽出して、分析している。このため、2013年、2017年ともにサンプル数は各々416件、675件となっていることに留意されたい。

⁵ 回答者の得点分布割合を考慮し、素データ（0-10まで11段階で幸せ感を計測）を、幸福度低（0-4）、幸福度中低（5-6）、幸福度中高（7-8）、幸福度高（9-10）の4グループに分類して分析した。

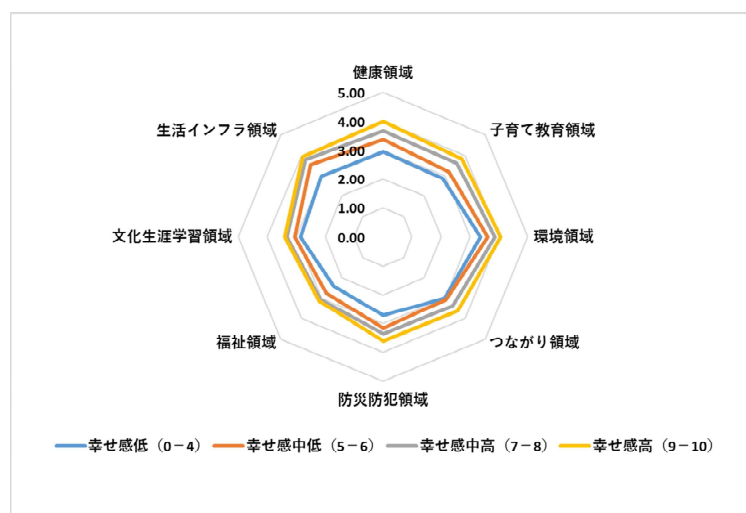


図1：幸せ感の度合い別8領域平均得点（2017年）

これは、理にかなっているといえるが、8領域すべてにおいて、両者が関係しあっている点の特筆すべきである。本調査の調査票は、2013年の調査設計時に実感調査隊メンバーが「幸せな長久手市を実現するために欠かせない要素」を意見交換し、8つの領域を抽出し、各領域ごとに調査項目と質問を練り上げて完成させたものである。したがって、幸せ感と8つの領域の間にみられる関係を確認できたことにより、本調査は、長久手の幸せなまちづくりを推進するうえで、活用に足るものであることを意味する。言い換えるなら、市民の幸せ実感を高めるのであれば、幸せ感を左右する総合的な生活評価である8つの領域の動向を把握し、どの領域のどの部分を改善していくべきかを検討するための材料を与えてくれる。どの項目に焦点をあてるべきかについては、簡便な方法として、8つの領域ごとに幸せ感のレベルに応じた領域別平均得点を算出し、その得点の分散（最低点と最高点の差の大きさ）に着目することである。分散が大きい、つまり、格差が大きい領域項目を優先的に改善していくことが考えられる。また、領域別平均得点が高いものから優先的に改善していくことも有効な方法であるだろう。

(4) 市民の評価による長久手の住みよさ

冒頭で紹介した「住みよい都市ランキング」で上位につける長久手市であるが、長久手市民自身はまちの住みよさについて、どのように評価しているのだろうか。長久手市民は、どれほど住みよいと評価しているのだろうか。住みよいことと幸せ感の度合いはどれほど関係しているのだろうか。

本調査では、長久手市の地域生活の総合的な評価として、「長久手を住みよいまちだと思いますか」、「今後も長久手に住み続けたいですか」の質問をしている。これらの質問への回答をもとに、長久手の住みよさについて当事者評価と8つの領域との関係から探ってみる。

図2は、住みよさの度合いと8つの領域別平均得点を表している。両者の間には、プラスの相関（+0.346）があり、幸せ感の度合いと同様、住みよいと思う人ほど、8つの領域の評価も高いことがわかる。回答者数は全体の5%程度に過ぎないが、「住みにくい」と回答した場合、すべての領域別平均得点が低いこと、それらの得点が「やや住みにくい」と回答したグループの得点との間の差異幅が大きい点が気になる。住みよさの度合いと今後住み続けたいか、という質問への回答との間にも、プラスの相関（+0.358）があり、住みにくい人ほど、長久手市から転出したいと考えていることがわかる。

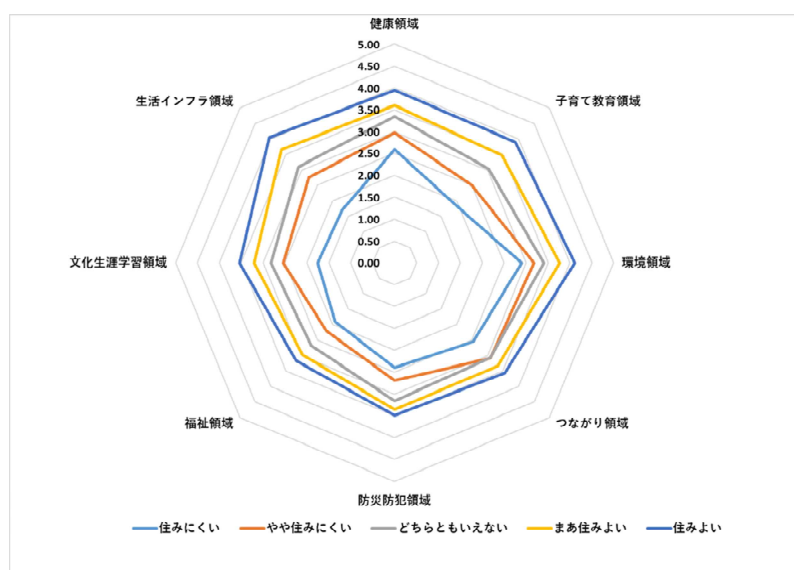


図2：住みやすさの評価と8領域平均得点（2017年）

確かに、「住みよさランキング」が示すように、長久手市民が現在の長久手市を住みよいまちと考えていることがわかる。ただ、相対的な割合は少ないかもしれないが、住みにくいと感じている人がいること、住みにくいと感じている人ほど、8つの領域の評価も低くなっていることには注意が必要である。また、「住みよさの評価」が高い人の中にも、幸せ感の低い人もいる。このように、住民の「幸せ感」を把握していくことによって、8つの領域からなる包括的な生活の質評価につなげていくことができる。

(5) 幸せのモノサシのキーワード：子どもと笑顔

本調査では、地域の子どものがのびのび育っているかどうか、笑顔で心豊かな生活ができているかについて尋ねている。表2は、この二つの質問への回答結果と幸せ感と住みよさの二つの生活評価の回答結果との間の相関を示している。「日頃から笑顔で心豊かな生活ができているか」と「幸せ感」との間にはやや強いプラスの相関（+0.540）があり、地域の子どものがのびのびと育っているか」と「住みよさ」の間にも、やや強いプラスの相関（+0.421）が確認できる。言いかえるならば、ながくての幸せのモノサシが目標に掲げるように、長久手の子どもたちが笑顔で暮らしていけるまちを実現することができれば、それと

ともに、市民の幸せ感を左右する 8 つの領域の状態も改善し、長久手市民の幸せ感や住みよさの評価も更に改善していくことが期待される。

表 2：幸せ感、住みよさ、笑顔と子どもの相関

	現在の幸せ感	長久手を住みよいまちだ と思うか	日頃から笑顔で心豊かな 生活ができていると思う か	地域の子どもたちは、の びのびと育っていると思 うか
現在の幸せ感	1	.346**	.540**	.298**
長久手を住みよいまちだ と思うか	.346**	1	.317**	.421**
日頃から笑顔で心豊かな 生活ができていると思う か	.540**	.317**	1	.329**
地域の子どもたちは、の びのびと育っていると思 うか	.298**	.421**	.329**	1

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

(6) 地域の宝と幸せ感

本調査では、地域の宝（風景、産物、文化、行事など）があるかどうかについても尋ねている。そこで、地域の宝を認識している人とそうでない人の間に、幸せ感や住みよさの点で違いが見られるのかどうかを検証してみたところ（図 3）、地域の宝を認識している人は、幸せ感も住みよさともに、高いことが確認できた。さらに、地域の宝があると回答している人には、長久手の宝についての自由記述の質問をした⁶。自由記述の中身は、第 2 編の調査結果報告を参照されたいが、長久手市は多様な魅力を持っていることがわかる。本調査の結果を幅広く共有することで、長久手の宝を具体的に確認し合うことに意義がある。まちの魅力は、まちに暮らす人々によって、見出され、磨きあげられて、宝物になっていく。長久手にある宝物を一つずつ増やしたり、地域の住民同士で共有することによって、市民の感じる幸せ感や住みよさがより高くなっていくことが期待される。

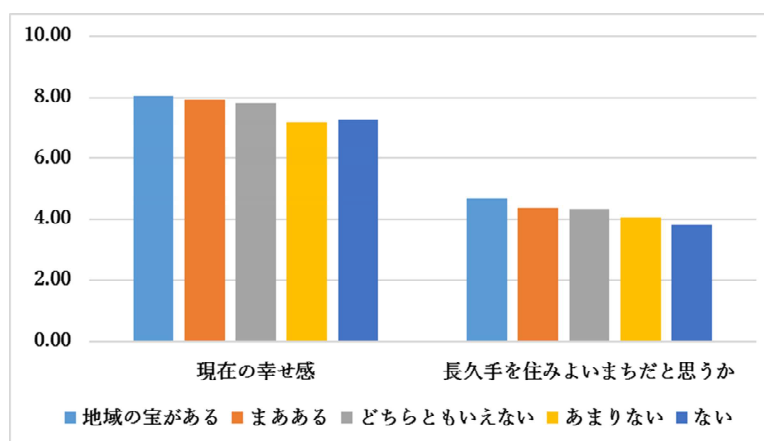


図 3：地域の宝の有無と幸せ感と住みよさ

⁶ 詳細は、第 2 編のアンケート調査結果報告書を参照していただきたい。

おわりに

幸せ実感調査の目的は、長久手市が掲げる住民主導で幸せな生活を実現できるまちづくりの実現に向けて、長久手市における生活の現状評価を市民の立場から行っている。幸せ感をまちづくりの総合的な評価として疑問を感じるという人の中には、「そもそも幸福とは、一人ひとりの感じ方の違いや幸福に影響を与える要素が随分と違う可能性が高いのだから、幸せ感のデータで把握するのは問題ではないのか」と、疑問を投げかける人がある。しかし、今回、2回の調査データをもとにしての長久手市の幸せ感と8つの領域の関係の分析から、市民の評価する幸せ感は、想定された以上に、現実のまちの状況に適応した多面的かつ包括的な優れたモノサシであることが明らかになった。幸せ感の高いグループは、異なる8つの領域全てにおいて、領域別平均得点が高いこと（つまり、自己評価による生活状態の良好さを示す）、反対に、幸せ感が低いグループになると、8つの領域全てにおいて、領域別平均得点は低く、自己評価による生活状態はもうひとつである。もしも、幸せ感の変動と相関するのが、8つの全領域ではなく、その中の特定の領域とはまったく相関していないのであれば、幸せ感で包括的生活評価をすることに留意が必要になる。しかし、長久手の2回の調査データによれば、幸せ感データによって、市民自身による生活評価に活用することに問題はないといえるだろう。

また、2回分の調査により、幸せ実感調査が、幸せ感や8つの領域に関する長久手市民によるまちのくらしの動向評価に活用できることがわかってきた。そこで、本調査の調査票の更なる改善や調査実施方法などの検討により、今後、長久手のしあわせのモノサシによる長久手のまちづくりの進捗状況評価を継続的に実施していくことが長久手のまちづくりに役立つことが期待される。

(2) 担当職員による考察

その１ 地域のつながりがあるまちは、子育てしやすいまち

「子育て・教育分野」のアンケート項目は全部で6つあり、そのうち5つの質問と幸せ感は、弱い相関があるという結果がでました（表2-1-1、63ページ）。子育て環境がよいまちは、幸せ実感が高いまちと言えます。

今、長久手市では、市民のみなさんが、まちに関心を持ち、まちづくりに参加する機会をたくさんつくっています。まちづくりに参加することが、子育て・教育分野にどう関係するのかについて、考えてみました。

若い世代の転入者が多く、子どもが増加しつづけている長久手市。日本経済新聞では、「子育てしやすいまち」全国第1位にもなりました。

では、実際に住んでいる市民の実感はどうなのでしょう。

【子育て・教育分野のアンケート項目】

	アンケート項目	H28 評点	H25 評点
1	市は安心して子どもを産み、育てることができるまちだと思う	3.92	3.94
2	地域の子どもたちはのびのびと育っていると思う	3.87	3.85
3	地域に子育てに関するサービスや施設が整っていると思う	3.43	3.30
4	地域に子育てや教育などについて相談できる人・場所がある	3.20	3.11
5	子どもとのコミュニケーションは十分とれている ①家庭内	4.03	4.03
6	②地域	2.86	2.84

項目1，2にあるとおり、まちや地域で見ると、子育て・教育環境はよいと感じている人は多いようです。

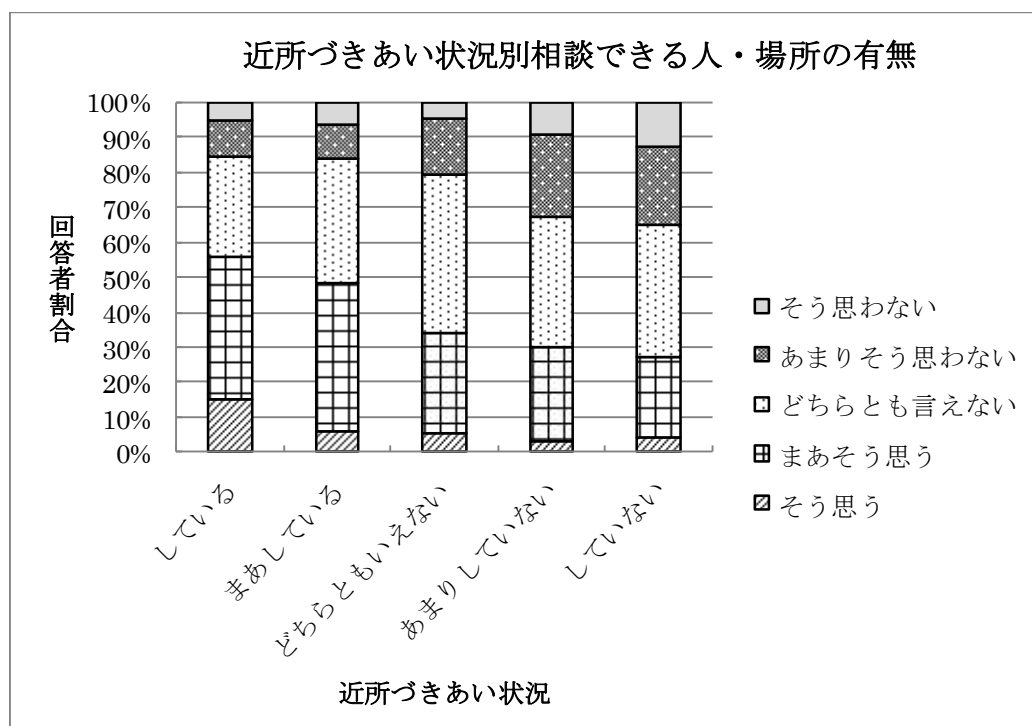
それに対して、個人の实感を聞いた項目3，4は、項目1，2の評点より低くなっています。

これらの項目の回答者の約6割が、子育て世代である30、40代の方であり、総合的には「子育てしやすい」とは思っている、実際の子育ての現場では様々な課題がありそうです。

項目3について、今後も市の施策や、NPO等の活動によって地域における子育てサービスや施設の充実が図られれば、評点（項目に対して肯定的に回答する人の数）を上げていくことが可能であると考えられます。

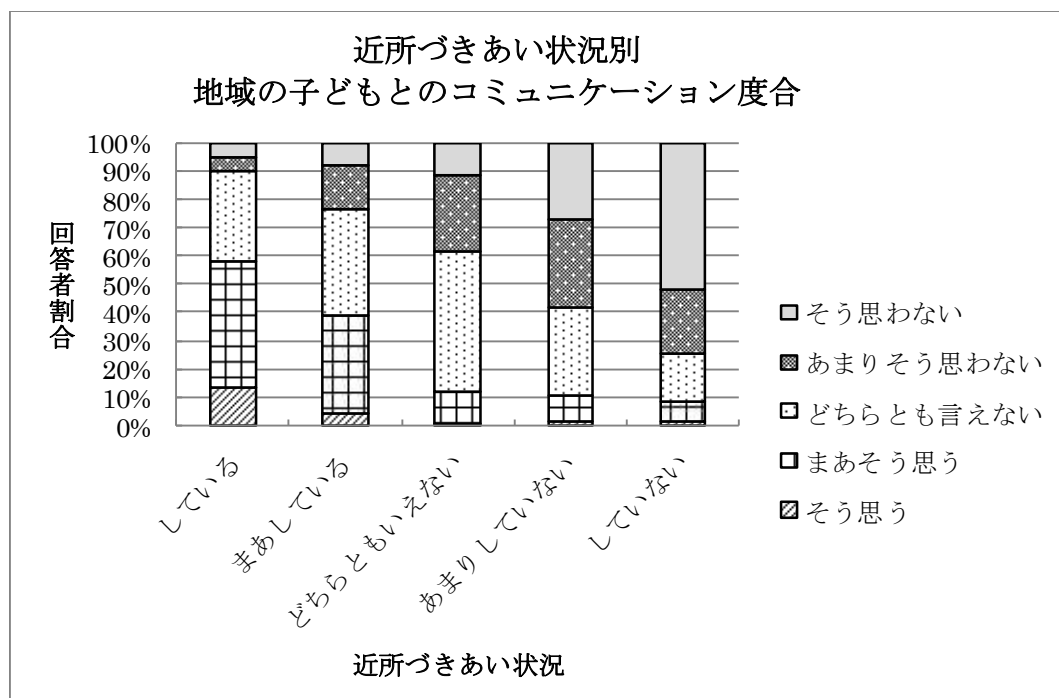
項目4については、ライフスタイルが多様化し、市が提供する既存のサービスを利用しにくい方もいるかもしれません。市の取組だけでは、子育てや教育に関して相談できる人・場があるという人を増やしていくことは難しいと考えられます。そこで、子どもを持つ親が、身近な隣、近所の人に気軽に相談できるよう、地域が地域の子どもの子育てに関わることができるまちづくりが必要ではないでしょうか。

ここで、近所づきあい状況と子育てや教育について相談できる人・場の有無の関係について見てみます。



近所づきあいをしている人ほど、4の項目に肯定的な回答（そう思う・まあそう思う）をしていることが分かります。日常の近所づきあいや、ご近所とのよい関係づくりにつながる地域活動への参加は、困りごと等を相談する人や場ができる、一つの要因になると考えられます。

次に、近所づきあい状況と地域の子どもとのコミュニケーション度合の関係について見てみます。



近所づきあいをしている人ほど、地域の子どもとのコミュニケーションが十分とれていると感じていることもわかりました。

アンケートの結果から分かるように、まちに関心を持ち、地域とつながることは、子育てや教育環境の向上につながり、子どもの幸せ、ひいてはまちの幸せに直結すると言えるのではないのでしょうか。

幸せのモノサシの総合指標（目標）は、「地域で子どもの笑顔を育てるまち」（16ページ参照）としました。子どもたちが家庭はもちろん、地域で出会う大人たちのふるまいが、子どもの幸せにつながるだろうという考えからです。

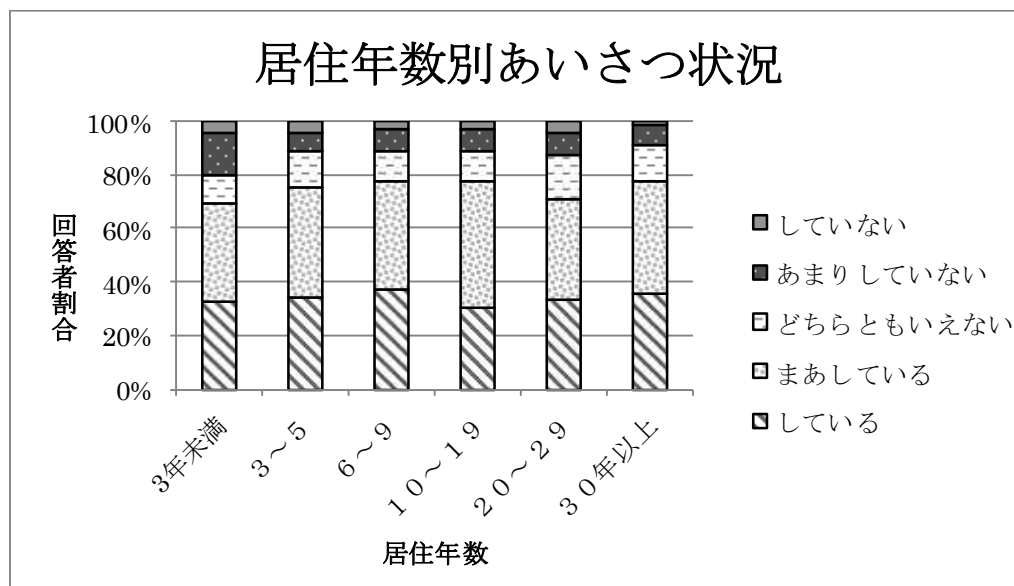
そのためには、地域で役割を持って活躍する大人が増やすことが大切であり、その第一歩はあいさつ、そして地域（まちづくりへの）参加であると考えています。

その２ 時間がかかっても、地域のつながりをつくろう！

アンケート項目の中で、他と比べて評点が低い「地域のつながり分野」と居住年数の関係について調べました。

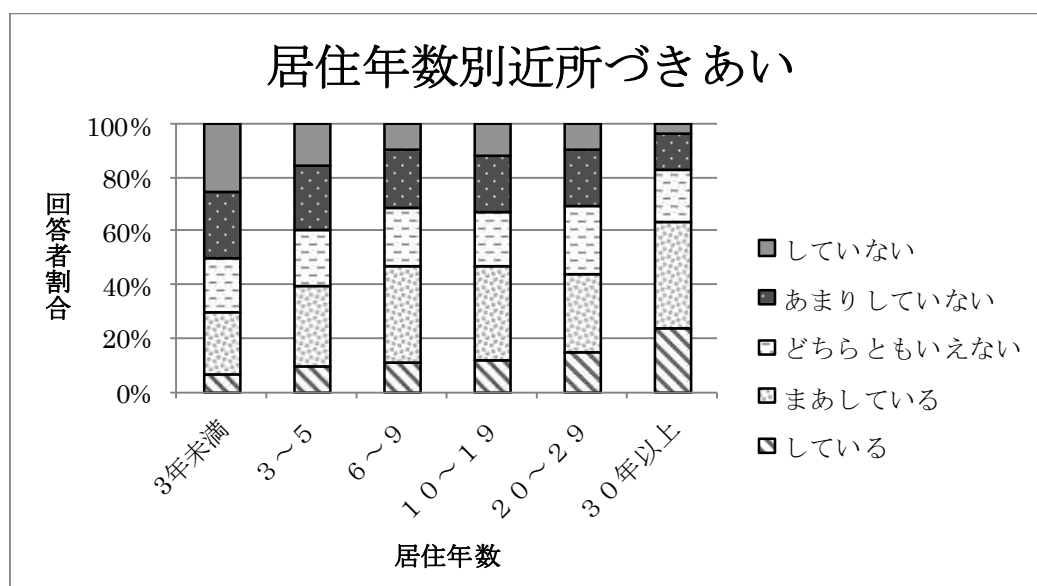
具体的には、あいさつ、近所づきあい及び近所づきあい満足度と居住年数とのクロス分析です。

まず、居住年数別のあいさつ状況を見てみます。



全ての居住年数で、「している」、「まあしている」は、3年未満、20～29年の居住年数が他の居住年数に比べ低く70％程度になっているものの、他の居住年数になると75％と高くなっていますがそれほど大きな差は見られません。

次に、居住年数別の近所づきあい状況を見てみます。

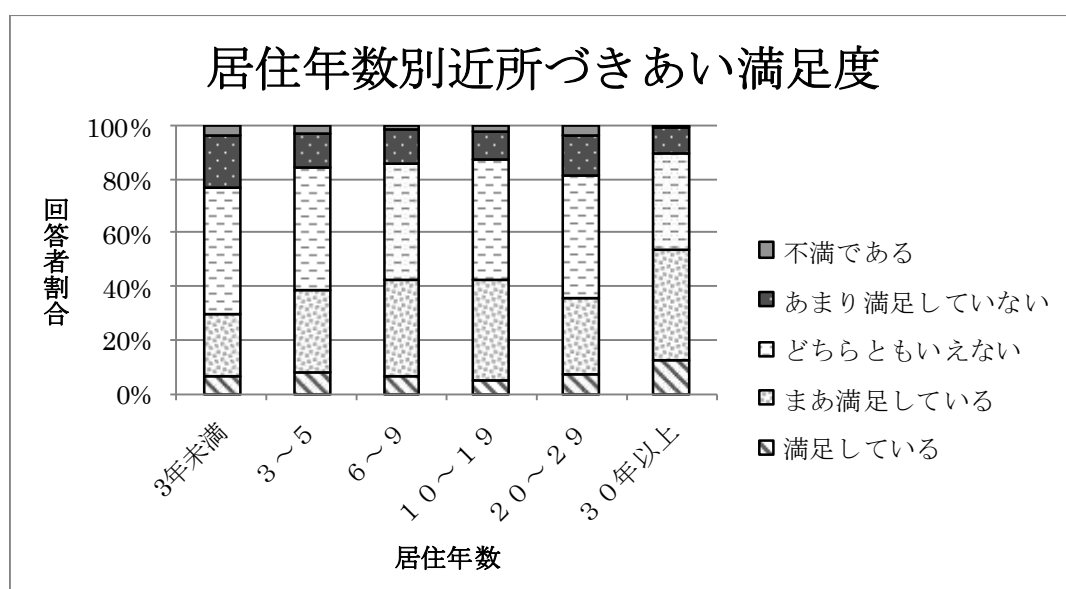


3年未満については、「まあしている」「どちらともいえない」「あまりしていない」「していない」がほぼ同じとなっており、「している」が極端に少なくなっています。

居住年数が3年以上になると、「まあしている」がどの居住年数でも一番多くなっています。

そして、居住年数6～9年、10～19年になると、「している」と「していない」が同数程度になり、その後「している」が「していない」を上回るようになり、居住年数が長いほど、近所づきあいをよくしていることがわかります。

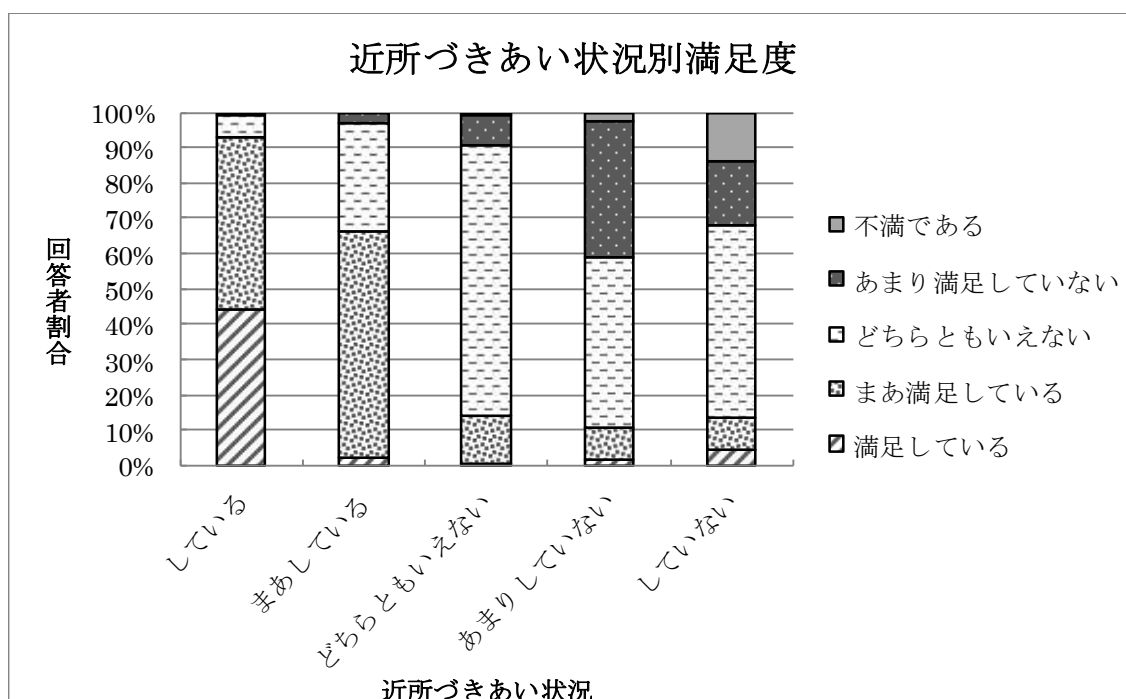
次は、居住年数別近所づきあい満足度を見てみます。



3年未満で、「満足している」「まあ満足している」の割合は30%に対し、30年以上になると50%になっており、居住年数が長いほど、満足度も高くなっています。

ただし、あいさつ状況、近所づきあい、近所づきあい満足度全てにおいて、居住年数20～29年が10～19年に比べ「している」「まあしている」、「満足している」「まあ満足している」の割合が低くなっている点が少し気になる点です。

それでは、近所づきあい状況と近所づきあいの満足度はどうでしょうか。



「近所づきあいをしている」と回答している方は、近所づきあいに「満足している」又は「まあ満足している」の割合が93%と高くなっています。

それに比べ、近所づきあいを「まあしている」と回答している方の「満足している」「まあ満足している」の割合は66%、「どちらともいえない」が33%と激減している点が気になるところです。

そして、近所づきあいを「あまりしていない」と回答した方の40%弱は、近所づきあいに「あまり満足していない」と回答しています。

以上のことから、近所づきあいの満足度、つまり「近所の人との付き合いがあってよかった」と思えるような関係づくりに取り組むことによって、近所づきあいの機会も増えていくと考えられます。また、近所づきあいをしたくても、きっかけがなくてしていないという方のための機会づくりも必要です。

このように居住年数別の分析をした結果、あいさつは居住年数に関係なくできるものの、近所づきあいになると、それ相応の時間が必要であることがわかります。

人と人とのつながりは、一朝一夕にできるものではありませんが、時間はかかっても、地道に取り組んでいきましょう！

